

長野 隆（ながの・たかし）

1、プロフィール

弘前大学教育学部教授として在職中、48歳で急逝した気鋭の文学研究者。萩原朔太郎、中原中也、太宰治など、近現代を代表する詩人作家を取り上げた論文、評論を多数著す。

<生没>

1951(昭和26)年10月14日～2000(平成12)年8月31日

<代表作>

『抒情の方法』『太宰治―その終戦を挟む思想の転位』(編著)『萩原朔太郎の世界』(編著)『中原中也魂とリズム』(編著)

<青森との関わり>

1983(昭和58)年、32歳の時弘前大学教育学部専任講師として赴任。弘前大学近代文学研究会を創設する。

2、作家解説

1951年10月、福岡県京都郡に生まれる。

福岡県立京都高等学校を卒業(喘息のため3年次1年間休学している)し、71年に関西学院大学に入学。文芸部に所属し、部詩「関学文芸」に参加する傍ら「関西文学」の会員になる。

74年に佐々木育雄らと同人誌「カルデラ」を創刊し、詩・小説・批評などの活動を行う。卒業論文に「日本文芸学の方法」と「島尾敏雄『死の棘』」を提出。

76年同大学大学院文学研究科博士前期課程に入学。

77年高校時代復学した3年生で同じクラスであった尾崎和子と結婚。

78年饗庭孝男主幹の「現代文学」に参加し、評論等を寄稿する。同年修士論文に「萩原朔太郎の象徴詩」を提出し、同大学院博士後期課程に進学。研究分野を中世歌論(藤原定家)へ移行させる。

79 年山田兼士らと研究同人誌「詩論」を創刊し、主たる批評活動の場とする。研究方法のあり方として、吉本隆明や菅谷規矩雄らのいわゆる「原理的批評」を標榜。

83 年弘前大学教育学部に国文学担当の専任講師として着任。弘前大学近代文学研究会を設け、会誌「弘前大学近代文学研究誌」を創刊。以後、毎年、講演会や合宿を重ね、学生の学問的視野を広げその資質の向上に情熱を傾ける。

86 年助教授、93 年教授。その間、88 年交換教授としてテネシー大学客員教授。

98～99 年国際交流基金の派遣教授としてカイロ大学大学院客員教授。研究テーマとしては、広く近・現代詩論、太宰治などを中心とする昭和文学、また、くうた > やくかたり > に関する原理的アプローチなどがある。

逝去後、山田兼士を代表として「長野隆著作編集委員会」が結成され、02 年 8 月、『長野隆著作集』（全 3 巻）が刊行された。

学生に対し、その能力を常に評価する姿勢を持って接した教育者としての、また、愚直なほどに魂を傾け取り組んだ研究者としての足跡の集大成となっている。